

本発表は、フランス・アカデミーのローマ校の活動を整理し、フランソワ・ブーシェ (François Boucher, 1703–1770)をはじめとする 18 世紀前半の若いフランス人画家たちがどのような教育を受けていたのかを確認し、その後の芸術家たちの制作活動にどのように影響したのかを考察することを目的とする。

1666 年にフランスの王立絵画彫刻アカデミーはローマに分校を設立した。アカデミーのローマ校は、古代とルネサンスの美術を研究し、その模倣や模刻の制作を目的として発足したもので、それらを本国に送ることが役目のひとつであった。ローマ賞コンクールによって選抜された奨学生が、給費を支給されてローマ校へ派遣された。ロココ様式が流行する 18 世紀前半のフランスにおいても依然としてイタリア、特にローマは若い芸術家が過去の巨匠たちの作品を学ぶために赴くべき重要な場所であった。在ローマ・フランス・アカデミーで行われた展覧会など (350 ans de création, Rome, 2016–17)、近年でもローマ校についての研究は活発である。本発表では時代ごとのローマ校校長、奨学生を整理して示し、どのような運営が行われていたのかを確認する。

ブーシェも修行時代にはイタリアへ留学している。ブーシェは 1723 年にローマ賞を獲得し奨学生としてローマへ行く権利を得たものの、アカデミーの財政難のあおりを受けて渡伊が叶わず、1728 年に自費で留学している。ブーシェの初期の活動についてはメトロポリタン美術館で行われた展覧会の図録 (François Boucher 1703–1770, New York, 1986–87) に収録されたローザンベールの論考があるが、留学中の足取りの詳細は明らかになっていない。当時のローマ校校長ヴルーゲルとダンタン公爵との書簡においてブーシェがローマ校に到着したことが伝えられているが、いつまでローマにいたのかも不明である。ブーシェはその後 1731 年にパリに戻っている。

またブーシェの同世代の画家たちもローマ賞を獲得しイタリアに留学している。特に重要なのがナトワール (Charles-Joseph Natoire, 1700–1777) とヴァンロー (Carle Van Loo, 1705–1765) で、彼らは同時期にローマでの留学生活を送り、ライバルとして制作活動を行っていた。それぞれが描いた「アエネアスのためにウルカヌスに武器を頼むウェヌス」を主題とした作品がそれを良く示している。これらは留学のあと比較的早い時期に描かれたもので、3 者のモチーフ選択や構図が酷似しており、互いの作品を意識して制作されたことは明らかである。しかしその表現には差異があり、彼らのイタリア留学での成果とそこで 3 者が目指したものの違いが現れている。本発表では 3 者の作品を比較し、その差異を説明する上で重要となるのが古代彫刻やルネサンス期・バロック期の作品の学習であることを指摘したい。

本研究を通してローマ校の実態を示すとともに、ブーシェの修行時代における古典主義教育と、そのような教育を受けた若い画家たちのその後の在り方を示すことを目指す。